

二〇二三年七月九日

御手洗を溢るる雫苔の花	ぼんこ
手を繋ぐ夫は片陰外れたり	よう子
立葵沖の波見る漁夫の妻	素 秀
白日傘六角形の影と行く	よし子
大岩を神と崇める木下闇	ぽんこ
亡夫の若き日を知る曝書かな	む べ
園児等の花丸の書の墨涼し	かかし
味見せよとて伽羅路を手の窪に	愛 正
園児嬉々お玉杓子に足生えて	こすもす
紹の羽織脱ぐや佳境の講釈師	よう子
冬瓜煮快気祝ひの鶴の碗	なつき
無農薬なる梅そばかす美人なり	なつき
青々と清しき茅の輪くぐりけり	はく子

毎週句会秀句・みのる選・二〇二三年七月一〇日